

「第二十六回庭野平和賞」 総裁ご挨拶

本日は、「第二十六回庭野平和賞」の贈呈式にあたり、文部科学事務次官・銭谷眞美様、駐日ウガンダ共和国 特命全権大使・ワックス・ビリッグワ様、日本宗教連盟理事長・岡野聖法様をはじめ、多くのご来賓のご臨席を賜り、あつく御礼申し上げます。

今年度の庭野平和賞を、ウガンダ共和国の聖公会牧師であられる「ギデオン・バグマ・ビヤムギシャ・参事司祭」にお贈りできますことは、当財団にとりまして大変光栄なことでもあります。

贈呈式でご挨拶を申し上げるにあたり、受賞者のお名前を、尊敬と親愛の念を込めて「キャノン・ギデオン」とお呼びすることを、お許し頂きたいと存じます。「キャノン」とは「参事司祭」の呼称であり、「ギデオン」はファーストネームであります。

残念なことに、新型インフルエンザの影響により、キャノン・ギデオンご本人の来日が叶わず、聖公会を代表して、日本聖公会 首座主教・植松誠様に代理受賞をして頂きましたことになっております。庭野平和財団としましては、キャノン・ギデオンのご功績を讃え、その歩みを一人でも多くの人々に共有して頂きたいとの願いのもと、本日、こうして贈呈式を行わせて頂いた次第であります。

先ほど、ご紹介がありましたように、キャノン・ギデオンは、H I V／エイズをめぐる諸課題に対して国際的な活動を進めておられます。国連総会で三度にわたり演説されたほか、世界四十カ国以上で講演なさるなど、H I V／エイズへの正しい理解を通して、適切な予防と治療を推進し、さらには差別や偏見を払拭するよう献身的に取り組まれています。

またキャノン・ギデオンは、自らがH I Vの陽性者であることを公表しておられます。私は、その勇気に強く心を打たれます。それは、H I V／エイズに苦しむ人々と、共に歩みたい、救いの手を差しのべたいという、宗教的な愛や慈悲、思いやりの心から導き出された決断であると受け取るのであります。

こうしたキャノン・ギデオンの生きる姿勢から、私自身、大切な気づきを得ることができました。きっと、この会場におられる方々も同様でございましょう。

さて、現在、世界のH I V陽性者は、三千三百万人におよぶといわれています。そして多くの場合、周囲の人々に正しい知識がないことから、差別や偏見にさらされているのが現状であります。

日本はどうかと申しますと、感染の報告件数が、この十年で約二・七倍になっているにもかかわらず、H I V／エイズに対する理解は、依然として不足しております。感染した方は、差別や偏見を恐れ、息をひそめるようにして生活しているという現実も見受けられません。日本の宗教界にとっても、非常に大きな課題であります。

差別や偏見は、常に物事を相対的・対立的に見る、いわば「人間の尺度」が生み出すものと申せます。善悪の価値観も、人間の狭い考え方が基軸になっていることが少なくありません。しかも、時代や国、文化、置かれた状況によって「尺度」そのものが変わります。倫理や道徳というものですら、一面では、人間中心の見方ということが出来るかもしれません。

一方、いわゆる「神の尺度」「仏の尺度」は、人間中心の価値観を超えたものです。現実をありのままにとらえ、善悪、美醜など、相対的な評価のない世界です。そして、生きとし生けるものへの愛・慈悲から、一切のいのちを包み込み、救いの手を差しのべるのであります。

キャノン・ギデオンは、次のようにおっしゃっています。

「H I V／エイズは、単なる病気ではなく、我々が地球という村の中で、お互いにどのような形でつながり合っているかを知る印である」と。

まさに「神の尺度」「仏の尺度」に貫かれた真実の言葉であります。

日頃、私は、物事をとらえる上で、「思考の三原則」ということを大事にしています。これは、「神の尺度」「仏の尺度」を、より具体的、現実的にしたものと申せましょう。

その第一は、「目先にとらわれなくて、できるだけ長い目で見ると」ということでもあります。

H I V／エイズについても、人類の未来という長い目でとらえ、一人ひとりが自身に直結する課題と受けとめ、意識を高めていくことが求められます。また、発病した方、陽性の方の「現在」だけではなく、人間の「人生」全体を見つめ、支えていくことが不可欠であります。

第二には、「一面にとらわれなくて多面的に、できるならば全面的に見る」とことでもあります。

現在、世界には、不平等による貧困が大きく立ちほだかり、H I V／エイズの治療さえ受けられない人々が大勢おられます。途上国の債務削減、債務放棄などを真剣に考えない限り、H I V／エイズの問題は、真の意味で解決の方向に向かわないとの指摘もなされております。医療という一面的な視点では、不十分なのであります。

第三は、「枝葉末節にとらわれず、できるだけ根本的に考える」ということです。

この世には、さまざまな困難に直面している方々がおられます。その一人ひとりが、神仏から見れば「神の子」「仏の子」であります。「人間の尺度」によって、人を裁いたり、評価したりするのではなく、一切のいのちを尊び、合掌重・礼拝し、愛と慈悲で触れ合うことが、神仏の願いでありましょう。このことが、H I V／エイズの問題を考える上での根本になると信ずるものであります。

その意味では、宗教者にこそ、H I V／エイズの問題に取り組んでいく「道しるべ」としての役割が課せられていると申せます。そして今、その先頭に立って尽力されているのが、キャノン・ギデオンであります。改めて深く敬意を表したいと存じます。

現在、私は、世界の諸宗教者の連合組織であるW C R P（世界宗教者平和会議）の活動に参画しております。キャノン・ギデオンも、W C R Pウガンダ委員会のメンバーと伺っております。全世界の人口六十数億人のうち、四十八億人は何らかの宗教を信じているといわれます。こうした宗教による社会的ネットワークを通じて、一つ一つ手を尽くしていくことが、今後の宗教者に課せられた使命でありましょう。

日本の宗教者の一人としましては、H I V／エイズの問題にどう取り組むかという、非常に重要な「宿題」を頂き、襟を正される思いがしております。

H I V／エイズに関しては、まだまだ課題が山積しています。しかし、キャノン・ギデオンが身をもって示してくださった勇気と思いやりを学び、活かしていくならば、未来は変えることができる、と信じます。

本日の贈呈式を契機として、キャノン・ギデオンの願いと行動を、より多くの人々が共有することを期待し、またキャノン・ギデオンが一層ご活躍くださることを祈念して、挨拶と致します。

皆さま、ありがとうございました。